

一次の文章の筆者は、アメリカと日本の図書館で働いた後、「子どもの読書を育てる」ために自宅で家庭文庫を開き、「東京子ども図書館」を設立しました。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

【一】子どもが最初に本と出会う場所は、家庭です。家庭であってほしいと思います。うちのなかに本があり、親が本を読んでいる姿を見る。それが、子どもには、本への第一歩です。この世の中には本というものがある。紙でできていて、外側は固く、①味はあまりよくない。開くと、なかにうすい、ひらひらしたものがあって、それには黒い点々がある。ときどき、絵も入っている。おとなたちが、それを手にしていることがあるが、そのときはおおむね静かだ、といったことが、本がある家庭に育つ子どもたちの、本というものに対する最初の認識でしょうか。

【二】本が、身のまわりに普通にあるものとして自然に子どもの意識にはいつてくる。それを読むという行為にも、まわりのおとなたちがしている日常のあたりまえのこととしてなじんでいく。それがいちばんです。家族がよく本を読む家庭では、子どもたちは、本を読むおとなの姿に、食事をしたり、掃除をしたりしているときのおとなとは違う、集中と②忘我（ぼうが）の空気を感じとるところでしょう。子どもたちがそれを見て、本のなかに何かたのしいもの、こころをひきつけるものがあるのだなと感じてくれたら、本への第一の扉は開かれたといつていいと思います。

読めなくても、読んでやらなくても、本があるだけでいいのです。ある作家の方が、自分のうちには父親の③ソウシヨがたくさんあった。自分はそれをまったく読まなかったけれど、でも、本棚から射してくるもの、いわば④本が発するオーラを浴びて育った。それは、よいことだった、と書いておられるのを読んだことがあります。それ以来、わたしも、本Ⅱオーラ説を受け売りすることに努めています。

図書館には来るけれど、遊んでばかりいて、ちつとも本には手を出さない子がいます。それでもいい、本のオーラを浴びているのだから、とわたしは思います。たとえ本を読まなくても、その子の頭のなかには、本というものが（背景として）意識されるでしょう。もしかしたら、そのうちに、そこに並んでいる本のタイトルが、ひとつかふたつ記憶されるかもしれません。そして、いつ

かどこかで、その記憶が、その子が本を読むきっかけをつくるかもしれません。少なくとも、本のあいだに身を置いた体験は、けっして不快なものではなかったはずです。本が快い記憶とともにある、それだけで十分だと思うのです。

生活のなかに本があり、子どもたちが多少とも本のオーラを浴びる環境かんきょうにいとすれば、つぎには、もう一歩すすんで本を読んでもやろうということになりますが、それはそんなに急がなくてもよいのです。子どもが生まれたら、自分の大好きな絵本をいっしょに読もうと、たくさん絵本を買いそろえて、^⑤手ぐすねひいて待つているおかあさんもいらつしやるでしょう。それに、今は「赤ちゃんから絵本を」という声があちこちから聞こえてきます。でも、^⑥わたしは、子どもが自分から強い興味を示すのでなければ、無理に早くから絵本を読む必要はないと思っています。【赤ちゃんに絵本を読んではいけないというわけではありません。でも、絵本に手をのばすまえに、もっと大事なことがあるのではないかと思うからです。

それは、ことばの土台をつくることです。本は、^{しよせん}所詮ことばでできているのですから、本を読むためには、ことばの力が必要です。ふつう赤ちゃんと呼ばれる時期は、生まれてから一年ないし一年半、歩くことができず、ことばもまだ出ていない時期を指します。この時期、赤ちゃんはめざましく成長しますが、「本を読む」という視点から考えると、それにいちばん深く関わる「ことば」の土台がつけられるときなのです。】

わたしは、何年か前から、子どもがことばを身につける過程に興味をもつて、自分なりの勉強をつづけてきました。そのために手にした本のなかで、いちばん胸に落ち、教えられることの多かったのは、^{注2}岡本夏木氏の『子どもとことば』と『ことばと発達』という二冊の本でした。『子どもとことば』のなかで、岡本先生は、子どもがことばを発するまでの一年、あるいは二年くらいの時期を「^⑦ことばの胎生期たいせい」と呼び、このあいだに子どもとのなかで、ことばがどのようにつくられていくかをくわしく述べておられます。赤ちゃんがお母さんのお腹のなかにいるあいだに、少しずつ成長し、^⑧時満ちて外へ出てくるように、まだ外に向かってことばを口にしないあいだも、ことばは子どもとのなかで^⑨チャクジツに育っており、いわばことばを使いこなすシステムが子どもの内部で出来上がったとき、しゃべりはじめるというのです。

岡本先生は、ことばに限らず、すべての発達は、人間関係を場として行われるとの立場をとっておられますが、なかでもことばの発達には、人間関係がいちばん大きくものをいうのです。ことばの胎生期にいちばん大事なことは、子どもが、親、あるいは自分のいちばん身近にいる人と気持ちを通い合わせることができるようになること。わたし流に言えば、十分かわいがられて、まわりにいる人に自分の気持ちがあわかってもらえるという安心感と信頼感をもつようになることです。

ことばを発するまえから、子どもはしぐさや、意味をもたない音声などで、自分の要求や感情を伝えようとします。たとえば、ねむいときに何かに顔をこすりつけるとか、「たかいたかい」をしてもらったのがうれしくて、もっとしてほしいときに「おー、おー」と声をあげるとか。そのとき、まわりのおとながそれを察して、「おねむになったのね」といって寝かせてやる、「もっとしてほしいのか、よしよし」といって要求に応えてやる。それがくりかえされると、子どもは、特定の動作や音声を特定の反応をひき起こす手段として使うようになる。これを岡本先生は「意図的道具性」と呼び、その手段を、身のまわりのおとなたちとの間で相互に理解し合って使うことを「協約性」と呼んで、この二つがことばの成立の条件だと述べておられます。つまり、あるしぐさや音声にある意味をもたせて使い、それが相手に通じるという体験がしっかり根付くと、ある時期までは、しぐさやただの音声であったものが、もつと便利な、広がりのある「ことば」というものに置き換えられていく。それが、ことばの獲得の過程なのですね。

日常のなかで自然に行われているこうしたやりとりが、実はことばの土台作りにつながっている、と知ったのは、わたしには大きな発見でした。ボール遊びだって、馬鹿にしてはいけません。子どもがボールをおとうさんに向かって投げる、あるいは転がす。受け取ったおとうさんが、それを子どもに返してやる。それをくりかえしてたのしむ。なんでもないことなのですが、こうした遊びをくりかえすことによって、「Aは、Bに、Cを、Dする」という文章の「コウブン」がつくりあげられていく、というのです。「ぼく(A)は、お父さん(B)に、ボール(C)を投げる(D)」というわけです。

つまり、赤ちゃんの時期には、身近にいるおとなたちと、十分な関わりをもち、たくさんのかたのしみを共有し、たのしみながら体験の量を増やしていくのがいちばんといえそうです。わたしが、早くから赤ちゃんに絵本をあたえようという動きにすぐには賛成でき

ないのは、この時期には、養育にあたるおとなと子どものあいだに、絵本といういわば第三者がはいってくるよりも、おとなと子どもが直接向き合って何かをする、という体験をたっぷりもつことのほうが大事だという気がしてならないからです。ことばの土台である、あたたかい、安定した人間関係が育っていないところに、早期教育を意図して絵本がもちこまれるのは、けっしてよい結果を生むとは思えません。

たとえば、赤ちゃんとおかあさんが互いに相手の目をじつと見つめ、視線がしっかりと結び合う、といったことが、ことばの基礎工事としてはとても大切だと岡本先生は指摘してきしておられます。この関係がきちんとできていると、おかあさんの目が別のものに注がれたとき、子どもは、おかあさんが見ているものを見ようとし、それに注目する。岡本先生のことばを借りれば、「視線の共有」が、「テーマの共有」につながり、話し相手と聞き手とテーマの三角形、すなわち対話の基本構造である三項関係さんこうが成立するというわけです。絵本を読んだときには、この関係ができていなければならないのはわかりでしょう。

親と子の関係がしっかりできていてこそ、両者のあいだに絵本がはいってきても、それがすんなりと受け入れられるのだと思います。ことばの胎生期には、やれ教育だの、絵本だの、と焦あせらずに、まずは赤ちゃんをたっぷりかわいがって、正面から向き合い、ゆったりとすごしてくださいと願います。

『子どもと本』松岡享子まつおかきょうこ

注1 忘我・・・あることに心をうばわれて、我を忘れること。

注2 岡本夏木・・・心理学者。

問一 子どもを本好きにするために最も大切だと筆者が考えていることを、本文の【一】・【二】段落から二つ読み取って、簡潔に書きなさい。

問二 ――部①「味はあまりよくない」とありますが、これはだれが何をしているときに感じたことですか。解答らんに合うように書きなさい。

問三 — 部②・④・⑨・⑩・⑫のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問四 — 部③「本が発するオーラ」とありますが、この言葉の文中での意味を二十五字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問五 — 部⑤「手ぐすねひいて待っている」・⑧「時満ちて」の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

⑤ ア 今か今かとただ待ち続けている イ うでまくりをして待ちかまえている

ウ 手元に引き寄せて機会を待っている エ 十分に用意して機会を待っている

オ 準備運動をして待ちかまえている

⑧ ア 制限時間が過ぎて イ 時間がありません ウ チャンスがやってきて

エ タイミングが合つて オ 時期がやってきて

問六 — 部⑥「わたしは、子どもが自分から強い興味を示すのでなければ、無理に早くから絵本を読む必要はないと思っています

す」とありますが、筆者がそう考える理由を説明した次の文の [] 部に当てはまる言葉を、【 】部から読み取って三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

絵本に手をのばすまえに、 [] ことの方がもっと大事だから。

問七 — 部⑦「ことばの胎生期」とありますが、それはどんな時期のことですか。文中の言葉を使って四十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問八 ―― 部⑪「それが、ことばの獲得の過程なのですね」とありますが、子どもがことばを獲得するためにどうしても必要な

ことは何かを説明した次の文の [] 部に入る最も適当な言葉を、文中からぬき出しなさい。

自分の動作や音声の意味が [] のくりかえし。

問九 ―― 部「ことばの発達には、人間関係がいちばん大きくものをいうのです」と筆者は述べていますが、ことばの発達に人

間関係がいちばん重要な働きをするのはなぜかを説明した、次の文の [] 部 A ～ C に入る最も適当な言葉を、それぞれ指定の字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

A (三十五字以内)

ことによって育つ

B (十五字以内)

こそが、

C (六字以内)

であるから。

問十 筆者の意見も参考にしながら、あなたの考える「子どもを本好きにする方法」をわかりやすく書きなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「どうして劇団行かないのよ」

お母さんが声をかけてきた。

「このあいだまで、あんなに張り切って行つてたのに。どうしたのよ」

「別に……。期末試験も近づいてきたし」

「だから最初に言つたでしょ。勉強との両立ちちゃんと出来るかつて。そうしたら彩希ちゃん、ちゃんとするから行かせてくれつて」
「……」

「一年間分の授業代、もう払つてんだからちゃんと行きなさいよ」

お母さんがガミガミと続ける。

「本当にさ、彩希ちゃんつて何をやつても続かないんだから」

彩希はダイニングの椅子から立ち上がった。これ以上お母さんと一緒にいると、本当にむかついてくる。それなのにお母さんの声が追いかけてきた。

「もしやめるんだつたら早くしなさいよ。お母さん、だからとどちつかずが大嫌いだから」

お母さんのウザさというのは、もう我慢出来ないぐらいだ。本当にイヤッ。

彩希は迷っている。劇団に通うのはとても楽しかった。演技というのは、与えられたセリフを覚えて口にするのではない。この人はいつたいどういう人で、どうしてこういうことを言うのか、よく考えなさいと教えられた。自分なりに登場人物を想像する。そして「誰か」を必死に創り出していく。演技トレーニングの日がどれほど待ち遠しかっただろう。日本舞踊の時間だつて、だんだん楽しくなつていったのに……。

彩希は友人たちにメールを打った。

「劇団やっぱりやめることにした。もともと試しに一学期だけ行ってみただけだから」

桃香ももかについた嘘うそと同じことをここでも言った。そして①彩希は自分のことがすっかりイヤになる。お母さんが口にした、

「何をやっても続かない」

という言葉が何度も頭の中に浮うかんだ。

自分って本当にダメな子じゃん、と思う。友だちに嫌われたくなくて、好きになったものを好きじゃないふりをしているんだ。

石川莉子りこたちとはあれからもずっと付き合いはない。ただLINEの悪口は消えたようだ。

「アイドルになるっていうならともかく、劇団に入るっていうのは少しも羨うらやましくなんかないんだけど、ただふつうのコが何かやるとき、あの人たちはムカツクみたいね」

そうか、やっぱりそうか。私は②ふつうの女の子として、しちやいけないことをしてしまったんだと彩希は考える。でも、やっぱり納得出来ない。しちやいけないって、いったい誰が決めたんだろうか。

そんな時、劇団の赤石先生から電話があつた。

「彩希、どうしてんの」

先生が、何だか懐かしい。『彩希』と呼ばび捨てにされるのもうれしかった。

「年鑑ねんかん出来てるよ。見においでよ」

それはテレビ局や③ザッソ社、広告代理店などに配布する劇団のタレント年鑑だった。先日写真を撮とられ、中学生の部に彩希ものっているはずだった。

「彩希、すっごく可愛く写ってるよ。あれならオーディションいっぱいいくかも。だから早くレッスンに来なきゃダメよ」

「あの……」

うまく言葉が出てこない。

「ちょっとレッスン、お休みしようかなアって思ってるんです」

「ふうーん、どうしたの」

「あの、勉強が急に忙しくなっちゃって」

「勉強も大切だけど、あれだけ一生懸命お稽古してたんだからもったいないわよ」

そして最後に先生は言った。

「④何もしないでいると、ふつうの子になっちゃうもの」

彩希は小さくあつと声をあげた。ここでは「ふつうの子」がまるで違った意味になっていたからだ。

「ふつうの子になるのはつまらないでしょう」

と赤石先生は言っている。ふつうの子じゃないといじめられるから、とにかくふつうの子に戻りたいと彩希は考えていたのに、

「早く時間つくって劇団にいらっしゃい。みんな待ってるわよ」

赤石先生は言った。

アンナからもメールがきた。

「サキーどうしたの。このごろお休みじゃん。私たちこのあいだ新しい劇やったよ。セリフいっぱいあるやつ。早く来ないと遅れちゃうよ」

あの仲間の中に戻っていきたいと思うけれど、クラスメイトのことを考えると⑤足がすくんでしまう。劇団には行かなくても⑥スむけれども、学校に行かないわけにはいかないんだもの。

それから半月たった。土曜日の午後だった。

自分の部屋で漫画を読んでいた彩希は、興奮したお母さんの声を聞いた。

「美冬ちゃん、オーディションに受かって、来週の『サスペンス劇場』に出るんだって」

「へえー、すごいじゃん。それで何の役？」

お母さんに、嫉妬しとしてるなんて思われたくない。
⑦ すごく明るい声を出した。

「何でも犯人の娘役むすめらしいよ。ちょっとしか出てこないって。しかも回想シーンなんだって。でもね、ちゃんとテレビ局のオーディション受かったって、玲子れいこは大喜びしてるのよ」

玲子おばさんはちよつぴり太っていて、彩希のお母さんの妹だが、フケてお姉さんに見える。それなのにどうして、美冬みたいなコが生まれたのか、親戚中しんせきが不思議がっている。

「これをきっかけに、プロダクションもがんがん売り出すらしいわよ。本当にすごいわねえー」

「ふうーん」

全くお母さんの無神経さというのは、表彰ひょうしょうものだ。もし、「世界無神経母コンテスト」というのがあったら、日本代表になれると彩希は思う。まず声が大きく、ところ構わずしゃべり始める。それもいつも彩希のいちばん触ふれてほしくない部分を、かりかり爪つめでこするようなことを言うのだ。

今だって、

「美冬ちゃんはすごいわ。それにひきかえ、彩希ちゃんときたら」
と言う。

「テレビに出る前に飽あきちゃったじゃないの、せっかく劇団入ったのに」

「私は、テレビに出るのが目的じゃない」

彩希は怒鳴どなった。

「お芝居しばいを勉強したかったのッ」

「なんだって同じことじゃない。ちゃんとやるからって、高い授業料払ってあげたのにさ」

本当に腹がたった。人っていうのは、⑧ ころいうことから非行に走るんだと思ったほどだ。

だから次の火曜日、絶対にお母さんとテレビを見るものと決めていた。⑨ お母さんは前日になって、飲み会に出かけることになった。

彩希は自分の部屋で宿題をしていたが、どうも落ち着かない。ちらちらと時計を見てしまう。幸いなことにあのウザいお母さんは⑩ルスでお父さんも遅いのだ。

「やっぱり、ちよつとだけ見ちゃおうかな」

⑪ イマに行つて、テレビの電源を入れた。長いCMがあつて「サスペンス劇場」が始まる。

美冬は薄幸な少女を演じようと必死だ。作り笑いを浮かべ、小首をかしげる。

赤石先生だったらこう言うに違いない。

「可愛く見せよう、可愛くものを言おう、なんて考えちゃダメ。人に何か言う時の顔を、鏡でよく見てごらんさい。⑫ コウカクを上げてしゃべつてないでしょう。あんなことするのは、そういう役割の女性タレントぐらいよ。わかつてるわね」

そうだよ。こんなの演技じゃない。パチツとスイッチを消した。

「こんなので、テレビに出たつて得意がつてバカみたいじゃん」

思わず声に出してびっくりした。後ろにお父さんが立っていたからだ。

「えっ、いつ帰つてたの」

「お母さんに録画頼まれてるの忘れてて、急いで帰ってきた。そしたら彩希がものすごい顔で見てるから……」

声をかけづらかった、ということらしい。⑬ 彩希は恥はずかしくてたまらない。だけどお母さんにだけは見られなくて本当に良かったと思う。

「彩希、負けるんじゃないぞ」

突然お父さんが言った。

⑭ 「(こ)うい(う)コに負けんなよ」

「……」

「世の中、頑張るコと運のいいコがいる。運のいいコの方が最初は前に出ていくけど、残るのは頑張るコの方だ。わかったな」

うん、と彩希はうなずいた。それからお父さんは彩希の頭をなでた。

「頑張るコは目立つ。でもそれでいいんだ。頑張ることを馬鹿にするやつらを、彩希は笑ってやれ」

彩希はもう少しで涙なみだが出そうになった。

彩希はまたレッスンに通い始めた。もうクラスのみんなに言いわけをしたりはしない。人がやっているLINEをのぞくこともやめた。

お父さんに言われてやっと気づいた。自分の大好きなことを、他人のせいでやめることはないんだ。意地悪をするコは、自分の好きなことをまだ見つけられない。だから見つけたコのことをいろいろ言うんだ。

「それはつらいことかもしれないよ」

お父さんは言った。

「見つけてしまったコは、いろんなことを言われるかもしれない。だけどね、お父さんとお母さんは、彩希をそれに耐たえられるくらい強いコに育てたつもりだよ」

それで彩希は心を決めた。また劇団の教室に行き始めたのだ。

お父さんはごほうびと言って、お芝居を見に連れていってくれた。

「ねえ、パパ。舞台のお芝居ってやつぱり大変なんだね」

幕間の時間、ロビーでウーロン茶を飲みながら彩希は言った。ストーリーは入り組んでいてよくわからない。みんなが笑うところもついていけなかった。しかし俳優たちの演技に彩希は興奮していた。

「そりゃ、そうだよ」

学生演劇をやっていたお父さんは大きくうなづく。

「テレビや映画の俳優も、みんな舞台に立ちたがる。そして一回でもやるとやみつきになるんだ。そのくらい面白いんだ。なにしろいろんな方向から観客に見られている。だからじっと立っている時も演技しなきゃならないからな」

「そうなんだ……」

彩希は学園祭の時のことを思い出す。演技なんて何もしなかったけれど、お父さんは二つのことだけ教えてくれたっけ。

「必ず前を向いていること」

「大きな声ではっきりセリフを言うこと」

あの時は本当に楽しかった。お芝居が終わって大きな拍手はくしゅをもらった時、体がしびれるような感じになった。あれを感動するって言っんだ。

また舞台に立ちたい。でもテレビや映画にも出てみたい。セリフというものを口から出してみたい……。

彩希はウーロン茶の残りをひと息に飲み、そして言った。

「^⑮ババ、今日は連れてきてくれてありがとう」

『私のスポットライト』林真理子

問一 ―― 部①「彩希は自分のことがすっかりイヤになる」とありますが、彩希はどうしてそのように思ったのですか。次の文の

部A〳〵Cに当てはまる言葉をそれぞれ指定された字数で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

演技は自分なりに登場人物を想像し、「誰か」を創り出すものだから、演技トレーニングの日が A(七字)が、友人に嫌われるのがいやで、 B(十七字)をしてしまい、結果的に母が言うように C(十字)ことになってしまったから。

問二 ――部②「ふつうの女の子として、しちやいけないことをしてしまったんだと彩希は考える」とありますが、「しちやいけないこと」とはどのようなことを指して言っているのですか。文中の言葉を使って十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問三 ――部③・⑥・⑩・⑪・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問四 ――部④「何もしないでいると、ふつうの子になっちゃうもの」とありますが、ここでの赤石先生の言う「ふつうの子」とはどのような子のことですか。最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の能力を最大限に活かして、あらゆることに対応できる器用な子。

イ 特技があるわけではなく、人並みのことをするのにも時間がかかる子。

ウ 与えられたことをし、周囲の人と同じことをすることで満足している子。

エ さまざまなことに挑戦^{ちようせん}をしようとするが、中途半端^{ちゆうはんぱ}なままあきらめる子。

オ 自分の長所を理解しており、それを活かせる分野でだけ力を発揮する子。

問五 ――部⑤「足がすくんでしまう」の意味として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 足がつかれたので、立ち止まってしまう。

イ 足をかかえて、座りこんでしまう。

ウ 足のふるえが止まらなくなってしまう。

エ 足を組んで、その場に居続けてしまう。

オ 足がこわばり、動けなくなってしまう。

問六 部⑦・⑨に当てはまる言葉を次のア～オのうちからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ つまり ウ 例えば エ だから オ また

問七 — 部⑧「こういうこと」とありますが、どういうことを指して言っていますか。文中の言葉を使って四十字程度で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 — 部⑬「彩希は恥ずかしくてたまらない」とありますが、どうして彩希は恥ずかしくてたまらなかったのですか。文中の言葉を使って四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 — 部⑭「こういうコ」とありますが、どのようなコですか。文中から五字以内でぬき出しなさい。

問十 — 部⑮「パパ、今日は連れてきてくれてありがとう」とありますが、このように言ったときの彩希の気持ちを書きなさい。

